

# 銀のスプーン

30集

銀のスプーン ペンクラブ

# 銀のスプーン

30集



銀のスプーン ペンクラブ

## まえがき

『銀のスプーン』は昭和六十二年（一九八七年）十一月のシリーズ第一集発刊から二十二年を経て、ここに三十集を発行することとなりました。共同自費出版という形でこれまで継続してきたことは非常な幸運です。発刊を支えていただいた方々に深く感謝いたします。

第一集はケース入り赤色布装幀の上製本で、十二作品、参加二十名、四六判九五五頁で、当時の意気込みと熱気が感じられます。初代編集・発行者の三宅さんは今なお病臥と闘いながら、発行人として頑張っておられるのは心強いかぎりです。しかし初期の出版活動を支えてこられた野原久さんや折目康夫さんはすでに鬼籍に入っております。

第二集は並製本となり表紙も黒に近い紺色で、十八作品、参加十三人、百九十五頁と倍増しほぼ今日に近い姿になっています。その後、平成五年、七年には年間二冊の発行、九集と十一集は重版。平成七年の十一集からは表紙がエンジ色になり、十二集では四十作品、二十四名参加、最高の三百十頁に達しています。平成八、九、十年にも年間二冊発行。平成十二年二十集から前集までの表紙は茶色となっています。三宅さんの健康状態から編集長の交替が長年の懸

案でしたが十九集から参加の恩田共同編集者が二十九集から編集長を引き継ぎました。

三十集からの表紙は環境の世紀を象徴する緑色としました。印刷は京都西院にある共同印刷工業（株）にお願いすることになりました。そして本の戸籍ともいえるISBNを取得し、同社自費出版事業部イーブックカフェ京都からの登録ですので発行所を「イーブックカフェ京都」としました。原稿の送り先や参加料・購読料払込み先などは従来通りで間違いなきようお願いします。これまで築かれてきた伝統を守りながら、新しい時代に入ることを願っています。

新しい時代といえば、世界はめまぐるしく変化しています。サブプライム・ローン問題に端を発した金融破綻はリーマンショックを誘発し、百年に一度と言われる世界不況が重くのしかかってきています。もう一つの要因は環境問題です。産業革命以来自然を無限のものとして収奪してきた人類が、気温上昇、異常気象など報いを受ける結果となっています。経済活動も環境という枠の中で活動しないかぎり人類の存続が保障されない事態に迫り込まれています。

政治の世界では、アメリカ初の黒人大統領オバマさんが就任し、人種問題、環境問題、核兵器廃絶問題など世界の情勢が様変わりしようとしています。日本においても、自民党政治が終焉し民主党政権が交替しました。日本の歴史上初めて民意による政権交代が実現したことは特

筆すべきところです。真の民主主義が実現できるのか期待と心配が交錯します。

『銀のスプーン』の関連では、日本ペンクラブ「平和の日」神戸の集いが三月神戸で開催され、芹生、恩田両編集委員が参加。椎名麟三の二つ目の文学碑が田麿さんらの努力で書写山麓の麟三生家の前に建立されました。春の叙勲では九集に寄稿いただいた薬学博士の二宮一弥さん、元猪名川町長の宮東一三さんがそれぞれ受章されました。六月には「交通新聞社新書」の創刊第一弾として村山編集委員が『可愛い子には鉄道の旅を』を上梓。七月には二十一集の震災体験手記入選の愛川弘さんが「コスモス文学賞」新人賞を受賞されました。「なにわ七幸めぐり」俳句には大和斉さんが佳作入選。十月の第二十四回国民文化祭・文芸祭短歌大会では二十九集「短歌と川柳」の平山公一さんが佐佐木幸綱氏らと共に選者をつとめ、一般の部で四千近い応募のなかから増井隆夫氏の薦により三宅発行人の作品が入選しました。いずれもペン友にとっては大変な励みとなりました。お祝い申し上げます。

討報も届きました。昨年は渡海照夫さん、関荘一郎さん、宮本忠雄さん、四月十日には平井汀さん。恩田編集長が『花と俳句をこよなく愛した 平井汀作品集』（四六判五十六頁）を百部手作りし、ご遺族、関係者に贈呈しました。また三宅発行人と田麿新さんを日本ペンクラブ

に推薦された直木賞作家の早乙女貢氏が昨年末に急逝されました。ご冥福をお祈りします。

前置きが長くなりましたが、三十集は企画テーマとして日本ペンクラブ「平和の日」神戸開催にちなみ「平和」を、太宰治・松本清張生誕百年にちなみ「文学の思い出」を設定しました。「平和」のテーマには多くの参加がありました。神戸大学名誉教授の浜本純逸さん、徳島県木頭村長として日本で初めてダム建設を阻止した藤田恵さん、ヴェトナムに残留し人民軍の将校としてフランスと戦った橋正義さん、ミクロネシア連邦名誉領事の荒木芳雄さん。西アフリカ難民問題は日本ではあまり知られていないまさに現代の問題です。ジャーナリスト平田伊都子さんが雑誌軍縮問題に掲載予定の原稿を了解を得て寄稿いただきました。池上編集委員の縁戚で四十年前に秘境パプアニューギニアを旅行された高松直彦さん、二十九集から参加のヴェトナム在住の新妻東一さん、生成学園在学中に終戦を経験した小松美博さん、芹生・池上・恩田編集委員。過去から現代に至る、世界に関連する多くの寄稿をいただきました。

テーマ「文学の思い出」に参加はありませんでした。生活体験記、自分史から出発、エッセイや文芸創作などにも門戸を開いてきた『銀のスプーン』としては更に頑張りたいと思います。

一般テーマの初参加は万年青年を標榜して活躍の中村幸男さん、恩田編集長の義妹でスウェ

ーデン在住四十年の速水妙子スヴェンソンさん、ペン友玉木新さんの生成学園同級池田信さん、篠山出身で神戸家裁調停委員の西垣豊さん、三宅発行人が通う介護施設・久代デイサービスセンター所長の西田義治さん、最近は特に環境問題に取り組む小林研一さん、異業種交流「一金会」メンバーの寺本征夫さん、二十一集以来久々の伊藤弘子さん、二十九集から引き続き参加は、水本・三宅さんの同級生田中昭子さん、舞子の孫文ゆかりの移情閣に通っている大和斉さん、一金会の牧彰さん、前川晋さん。そして常連の方々とおわせて三十二名に達しました。

この他にも参加予定の多くのペン友が諸般の事情や闘病のため寄稿を断念されました。療養中の方々の一日も早いご回復をお祈りします。

**三十一集の原稿募集** 引き続き原稿募集を行います。投稿規程は変わりませんが、気楽に参加できるように経済的負担を少しでも軽くできればと検討しています。第一次締め切りを三月末に設定しました。企画テーマは「環境の世紀」などを考えていますが、提案・意見をお待ちしています。

二〇〇九年十一月 編集長 恩田怜

編集委員 豊嶋晃、芹生弘、村山茂、池上正示

## 目次

まえがき

### 平和の日

平和の日	恩田 怜	12
日本ペンクラブ第二十五回「平和の日」神戸の集い 報告		
国際ペン「平和の日」	芹生 弘	22
日本の平和運動と平和教育（その1）	浜本 純逸	24
人類が生き残る三つの条件	藤田 恵	29
徴兵制は有効か？	池上 正示	37
雨宮処凛著『怒りのソウル』から見えてくること		
八月十五日	小松 美博	41
戦争は人類に何一つ幸せをもたらしません	橘 正義	49
戦後五十幾年、戦中戦後の波乱万丈の自身を振り返って		

ヴェトナム残留日本兵のこと……………新妻 東一

ミクロネシア連邦をご存知ですか……………荒木 芳雄

ミクロネシア連邦名誉総領事に任命されて

懐かしのパプアニューギニア(上)……………高松 直彦

最後の植民地 アフリカ西サハラ……………平田 伊都子

### 銅鑼

銅鑼(俳句)……………大和 斉

春の風邪(俳句)……………三宅 啓弘

稲雀(俳句)……………田中 昭子

臥床十句(遺作)(俳句)……………平井 汀

親子(川柳)……………田中 昭子

夏のオーストリア(短歌)……………伊藤 弘子

あらたまの光(短歌)……………三宅 啓弘

妻の定年(詩)……………田中 昭子

123

120

117

115

114

112

110

108

87

69

62

56

歳時記 多太神社の森	中村幸男	125
ねずみの一日	福中保江	130
二つ目の文学碑をめぐって	田靡新	132
燭台	北上弘美	140
変な年の大変なこと!	前川晋	142
皆既日食が見たい	村山茂	146
天体ショーを楽しむ		
料理・七十の手習い	浜本純逸	148
阪急電車のファッションショー	村山茂	152
『可愛い子には鉄道の旅を』を読む	芹生弘	154
神戸女学院でコンサートを聴く	芹生弘	156
老いを生きる	北上弘美	158
爺イの喜寿のお祝いに!	前川晋	160
桜(サクラ)の雑感	牧彰	165

スウェーデン便り……………	速水妙子スヴェンソン	
丹波楽農日記(1)……………	恩田 怜	176 170
有機野菜を作り丹波に通う		
想い出……………	福中保江	190
野辺おくり……………	福中保江	191
釣り物語り(1)……………	浜本純逸	196
鯛を釣る		
昭和十四年(1939年)のことだった!	前川 晋	201
扇風機……………	北上弘美	204
蛭……………	北上弘美	206
修学旅行……………	福中保江	208
神戸はじめ物語……………	千葉俊壹	210

中国語 ng 韻尾とカナ表示

中国語 ng 韻尾とカナ表示	池田信	216
なぜ看 kan はカンで康 kang はコウなのですか？		
家庭裁判所調停委員と英語	西垣豊	227
福祉事業の先駆者 北村好男氏を偲ぶ	西田義治	232
清浄世界を求めて	小林研一	234
官僚政治の崩壊と平安時代	寺本征夫	237
極論「東大解体」	前川晋	240
日本の国を改造する方法・あなたの提案は？（極論討論会のテーマ）		
だれでも大統領に	豊嶋晃	244
大雨時の災害は「人災」	藤田恵	253
加藤清正公と本妙寺の文化遺産を守る	池上正示	258
あとがき		
寄稿者紹介		

# 平和の日

日本ペンクラブ  
第二十五回平和の日神戸の集い



鳩をデザインした平和の旗を受け取る奈良の中山悟氏と左は阿刀田会長  
日本ペンクラブ会報より

## 平和の日

日本ペンクラブ第二十五回「平和の日」神戸の集い 報告

恩田 怜

「平和の日」その言葉の響きはなんと穏やかなことか。ちなみに広辞苑によれば平和とは「平らかにやわらぐこと。おだやかでかわりないこと」とある。私たちが普段「おかわりございませんか」と挨拶を交わすのも、平和を求めている証、単に戦争だけでなく、地震や台風、疫病などに脅かされることなく暮らせることが平和という言葉の意味であろうと思う。

○九年三月三日、日本ペンクラブの第二十五回「平和の日」の集いが神戸大倉山文化ホールで催された。阪神淡路大震災から十四年がたち、神戸にも平和が訪れたといえる催しであった。以下平和や文学についての話を中心にその報告をさせていただく。

会場に着くと続々と人の波が続いている。どこかの党が動員をしたのか、それにしてもすごい人の数だ。中へ入ると開演三十分も前だというのに、ほとんどの席が埋まっていて座るところが見つけられない。幸か不幸か舞台の直下の最前列に座ることになる。

プログラムは二人四組のリレートークが予定されていて豪華メンバーに期待がふくらむ。

司会の高橋千劍破事務局長から、日本ペンクラブ「平和の日」は一九八四年大江健三郎氏の提唱で三月三日ひな祭りの日に決められた。そして国際ペンクラブもこれに同調し三月三日には世界中で「平和の日」の集いが催されていると紹介される。

阿刀田高会長から、日本ペンクラブは七十四年の歴史を持つと聞き、自分と同じ歳と気づく。表現の自由を守っていくことがスタートの理念で、平和と表現の自由、環境保護について主張してきた、さらに物書きの集団ゆえに言葉の問題、日本語を大切にしている活動を目標にしていると挨拶がある。続いて知事と市長の挨拶も入る。

### 平和の日に思う　いのち　竹下景子・浅田次郎

最初に浅田次郎さんが竹下さんとは初対面だと意外な挨拶をされる。自分達の世代は理想のお嫁さん像として竹下さんを見てきた、自分と竹下さんとは適齢であって、何百万人の中から射止められたご主人はすごいとヨイショされる。竹下景子さんは神戸の松方ホールで毎年震災記念日の公募作品の朗読を続けておられるので、何度かお目にかかっている。

誰かがやらなければならぬことに手を上げるのは勇気がある。竹下さんは偉い。震災によって失われた人々の思いや暮しを語り継いでいかなければならない。平和を考える時、神戸の震災は一つの出発点になったと思う。高度成長期に育った平和ボケ世代には命の安全が保証されている時代のことを平和ということを知ったと浅田さん。

文学青年であった浅田さんは三島由紀夫の自衛隊乱入自害事件に興味を持ち翌年に入隊している。何年か上の先輩が最近「日本も核を持って」といつて首になったが、核兵器を外交のカードに使うというのは間違いで、核を持つことによって平和のバランスを取るなどというのは幻想だ。世界で唯一の被爆国である日本が持つというのは歴史に対する冒瀆でもある。

竹下さんは、北海道富良野で倉本聡さんらと環境を守るための活動をしている。五感を働かせ自然を実感し、ゴルフ場を森に戻している。芝をはがして木の苗を一本づつ植樹しているが元の森に帰るには五十年はかかる。子や孫の世代に森になっていたらいいと思う。

今は空前の不景気だがこれをチャンスに変えて、特別な場所に行って贅沢するのではなく、日本の美しさを見直し、これまでの生き方を考え直す絶対のチャンスだと思う。

平和の日に想う、地球環境、立松和平・吉岡忍

立松さんの曾祖父さんは兵庫の生野銀山におられ「白い壁の家で、すごくいい所だった」と聞いていたとのこと。明治の半ばに栃木県足尾銅山の開発に加わったが、足尾鉍毒事件が起き、はげ山になってしまった。そのはげ山に植林する運動を何十年もやっている。そして先祖のルーツをたどって『恩寵の谷』という小説を書いた。神戸新聞に連載中にあの大震災があった。震災にもかかわらず神戸新聞は一日も休まずに出してくれた。

吉岡さんは震災の日、東京から飛行機で伊丹にきてタクシーで神戸入り、それから新神戸駅前にテントを張って一ヶ月暮らした。神戸に来て二日目にテレビの中継を頼まれた。被災者たちがお互いに自分達で助け合いをはじめたことに感動して伝えようとしたが、もつと悲惨なことを伝えて欲しいと断られた。八百屋さんは野菜を、菓子屋さんは菓子を、売っているものをただで持つていってくださいという光景にびっくりし感動した。東京のスタジオでは自然災害に備えてアメリカのFEMAのような強い権力や装備を持った組織が必要だと多くの評論家がしゃべっている。震災の現場へは日本中から消防や警察、自衛隊が来ているのだが、地図を見ながら「ここはどこでしょう」と聞いている。現場では異邦人で思ったとおりに動けない。

現場を見ないで評論家は何を言っているんだと思った。

戦場への取材にはたびたび行ったが本当に怖い。しかし一世代前の親たちは突然引つ張られて戦場に行っている。命からがら戻ってきて手記など書かれているが、兵隊のことはつらかったとしか書いていない、親の世代はそうして命を守ろうとした。

六八年、ヴェトナム戦争のときソンミ村虐殺事件があった。アメリカ軍が六百人ほどの村を四時間で全員を虐殺した。娘の時、死体の間で氣を失って助かったというおばあさんは、十年ほどアメリカ兵を恨み続けた。だけど憎しみをかかえて生きていくのは苦しいと気づいて、その兵士達を許す氣になったという。一方加害者の兵士達は自分のやったことにどう対しているのかわからず自殺とか酒におぼれたり立ち直れないでいる。戦争の悲惨さ、戦争の体験、戦争の事実を知らない、妄想が広がって残酷なことを考えたりすることになる。

映画の『おくりびと』では人間は有機物だから腐る。自然というのはいままでできていて、細菌やバクテリアによって土に還っていく自然の循環がある。高校生から「経済がおかしくなつて、回復しようと努力しているけど、どうして環境問題をそこまで本気でやらないのしょう」と手紙をもらったけれど、確かにそうだと吉岡さん。

昨年(2011年)の二月に「災害と文化」という国際フォーラムを日本ペンクラブでやったが、すべての共同体の神話とか言い伝えの中には、巨大な災害が含まれていて、一番始まるのそこにはそういうものがある。共同体の一人ひとりが不幸な体験を記憶して、知恵を働かせ、生きなおすしていくのが人間である。

平和の日に思う、子ども、俵万智・新井満

俵さんの父親は神戸育ち、神戸のおばあちゃんに万智の名前を付けてもらった。新井さんは新潟生まれだが神戸は第二の故郷。二十代を神戸支店で十年以上すごし、深江や北区のひよどり台、森市場に住んだ。いろいろな人と出会って、普通のサラリーマンが突然、作曲家になったり、シンガーソングライターになったり、文章を書いたり、歌を歌うことになった。東京に転勤してしばらくして大震災があった。森市場の近くのマンションに見舞いに行ったら四階建てがつぶれて二階建てになっていた。高校三年の時に新潟地震を体験しているので、神様ってなんでこんなに不平等なんだろうと思った。

俵さんは昨年の国際フォーラムで大震災の時に読まれた短歌を紹介される。

真下より突き上げられて胴上げに　しくじった人のように落ちたり（大西由美子）

これは経験した人で無いと読めない歌で、こんな揺れだったんだと解った。

つくづくと吾は被災者避難所の　トイレ通いに人の足踏む（平野太郎）

避難所の人の密度、生身の人間がそれだけいるのが伝わってくる。こういう短歌で人々の心や有様が伝わってくるのは、言葉の力、文学の力です。

新井さんの「千の風になって」が人々の心を癒した、震災で亡くなられた方々の横顔を思い浮かべながら聞いてくださいと、帽子を被って出てこられ、歌詞の朗読と歌が披露される。皆さんはこの歌は子どもに人の死というものを伝える時に説明しやすい。伯父が亡くなった時「おじちゃん風になって見守っていてくれるからね」と子どもにいうと「そうなんだ、風なんだ」と。でも「おじちゃんほどの風」と聞かれた。

新井さんはひよどり台で長男が生まれ、赤児を見たとき指がすごく長く見えたので、弦楽器奏者にしようと「弦」をつけた。名前は親が送る最高・最大のプレゼントだから一生懸命考えた。将来は世界的な弦楽器奏者だと、親バカです。子どもはベットの医者になりました。

俵さんは子どもがなかなか寝なくて、寝てくれると拝みたいくらいだった。赤ちゃんを産む

つてことは大変なことだと思つた。

俵さんと新井さんは『プーさんの鼻のララバイ』という歌を作っている。俵さんの『プーさんの鼻』という短歌集から数首を選んで新井さんが曲をつけた。ララバイは子守唄の意味で俵さんの「寝てくれ」という思いが歌の中にもつている。

俵さんの朗読と新井さんが歌う大サービスがある。

舟になろう 舟になろう

いや 波になろう 海になろう

腕にこの子を揺らし 揺らし

眠らし 眠らし

平和の日に想うくらしぐ 黛まどか・阿刀田高

ノーベル平和賞のマータイさんが日本の「もつたいない」に注目して世界語にしようと言われたが、阿刀田さんは日本には物をあまり使わずに、精神的な深いものを求めていく思想があるとある国際会議で発言した。唐草模様の風呂敷を持って行き、これが日本のハンドバッグで

ある、大きなものでも、小さいものでも包むことができる。寒い時には首に巻けばマフラーになる、更に金がなくなればグルツと頭に巻いて「金を出せ」…でかなり受けたと。(笑い)

また日本には十七語ではなく十七文字で自然と人間の心を通い合わせる詩歌がある。

黛さんの父親は俳人の黛執氏で子どもころより俳句が日常的にあったが、社会人になって女流俳人杉田久女をモデルにした田邊聖子の『花衣ぬぐやまつわる』を読んで、初めて父の句集を見た。そして「燕の空更に高き父の空」という句を見て祖父がなくなつた時の父の深い悲しみが解つた。それで俳句を始めた。周りの方に聞くとなんでもないひよつとしたことで始めている方が多い。俳句人口は八百万人とも一千万人とも云われ「俳句甲子園」という高校生を対象としたイベントがあつたり、お茶の会社が俳句を募集したりしている。ニューヨークタイムズ紙の東京支店長が阿刀田さんのところに来て、日本は経済大国だといわれるけれど、詩の大国だということを知つて大変驚いたと。どの新聞、雑誌にも俳句・短歌・川柳のコーナーがありおびただしい数の詩が寄せられている。俳句は日本の文化の基盤のようになってきている。

俳句は、ここはこの言葉をもつてくるよりほかにはないという言葉を探してくる。黛さんは「雨」がどれほどあるか書いておられるが、時雨、水雨から始まって菜種梅雨、花菜雨、花時

雨、利休鼠など四百以上はあるという。このような表現が多い日本語の特徴を通して自然との出会いを楽しんできた。俳句は自然を読むことが重要で、唯一のルールは有季定型、季語があつて五七五。俳句は自然への挨拶です。私達は人と会つたりすると季節の挨拶をしているんです。「今日は寒いですね」「雨が降りそうですね」とか、同じように俳句にも季節を入れます。

それから型も大切で、型というのは決して片苦しくない。良く体操に例えるが、枠があつて、バク転してきて足がその枠の中、ぎりぎりのところに落ちて決まった時の緊張感。それと同じように俳句も五七五という型があるから、その中で自由に遊ぶことができ、羽ばたくことができる。やはり俳句と名乗る以上は季語と五七五の型を守ることが重要なポイントである。

神戸の方々も震災の時に俳句を詠んで心を慰めたのではないかと思う、と締めくくられる。いつの間にか三時間半がたち、リレートークが終わりとなる。来年は奈良での開催と太陽に平和のシンボルの鳩をデザインした旗が奈良市へと渡される。来年九月に開かれる東京大会のテーマは「環境と文学」と紹介される。

満ち足りた気持ちでロビーに出て、黛まどか著『あなたへ一句』を買って家路に着く。

## 国際ペン「平和の日」

芹生 弘

文学者は平和を求めます。

一九五八年を第一回として、毎年三月三日を「平和の日」と定めて世界中のペンセンターで平和を希うキャンペーンが開かれている。以下はペン大会からの報告である。

一九五一年生まれの浅田次郎氏は五八歳の戦後世代で、「平和ほけ」と自ら言われる。しかし、震災の神戸を見て戦争に同じくする体験であった。その時は身近に助け合う人々の姿があった。竹下景子さんは富良野での体験を語った。吉岡氏と新井氏はさらに若い世代であるが、世界各地の戦争、コソボの民族間の憎悪、ソンミ村の虐殺などを身近に見て来たお話があった。私はここで思う。戦争というものの愚かさを。今日の最大の問題は世界中を覆う不況の嵐であるが、これもイラク戦争で始まった長期にわたる戦費の支出が、アメリカを襲った金融の破綻に繋がっていないと誰が言えようか。確かに湾岸戦争では一定の戦果を挙げた。しかし、テ

口に対する処置は誤りであった。ビンラディン只一人を指名手配すれば充分であるのに、イラク戦争を始めたことが却って地域の平和を損なうことになった。罪のない人々、多くの子どもたちが犠牲になった。戦争が紛争解決の手段として無力であることが益々はっきりするばかりであった。今日こそ、我々は平和の尊さを世界に向かって発信すべきである。



前日に行われた「平和の日」記念植樹  
瀬区の市立神戸文学館の前庭にて

## 日本の平和運動と平和教育（その1）

浜本 純逸

はじめに

この八月に、中国と日本の学生が集う、第七回アジアハウス（ヒューマンビジョンの会）において、表題について話す機会があり、あらためて「日本の平和運動は、原水禁運動と日米軍事同盟反対運動の二つを中心として展開されてきた」ということを確認することができた。二つの運動の後、水俣病の告発・学生運動の暴力化・部落解放運動など多様な展開がなされるようになったが以前よりは影響力が少なくなった。一九七〇年頃からはベ平連（ベトナム戦争反対市民連合）が新しい型の平和運動を展開し始めた。一九八〇年頃からは、社会の発展のために何かをしたいという人々がそれぞれに各地域でNGOやNPOの運動を続けるようになった、と感じている。ヒューマンビジョンの会も、このときの新しい動きに絡んで生まれたように思う。一九九一年のソビエトの崩壊とベルリンの壁の消滅は、社会主義社会に希望を抱いていた

私にはシヨックであった。

講演を終えた時、あまりにも歴史の表面を通史として語るだけであったことにむなしさを感じたので、本稿では、七十年の私の人生とのかかわりにおいて、日本の平和運動と平和教育の歩みを振り返ってみたい。

#### 一 原水禁運動の始まり——第五福竜丸の被爆

一九五四年、高校一年生の私は地方紙と読売新聞の配達をしていた。テレビはまだ普及していなかった時代である。早朝に誰よりも早く新聞が読めることを新聞配達者の役得と心得ていた。三月のある朝の新聞の一面に大きく「第5福竜丸被爆——ビキニ環礁でアメリカが水爆実験——」という見出しが躍っていた。船長の久保山さんをはじめ乗組員が水爆の灰を浴びたために体調をくずして焼津港に帰ってきた、広島・長崎に次いで日本の第三回目の被爆、という記事であった。

新聞の配達を終えた帰り道でくり返し記事を読み、「朝鮮戦争が起こったとき人間に絶望して鉄道自殺した原民喜」のことを思い、人類の未来は絶望なのか、などと思ったりした。

この福竜丸の被爆事件がきっかけになって日本では原水爆実験禁止の署名運動が起こり、三〇〇〇万人の署名が集められた。その取りまとめに当たった人々の力が結集して、原水爆禁止日本協議会が結成された。

峠三吉の「原爆詩集 序」という詩を読んだのは、広島大学に入学して一年後の一九五七年の夏であった。

原爆詩集 序

峠三吉

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

## 二 日本教職員組合の結成と反戦意識

一九五八年に、私は、竹本千万吉先生のお兄さん（当時、広教組の副委員長）を頼って広島県教職員組合を訪ねた。竹本千万吉先生は私が高校時代に入っていた考古学研究部の顧問であった。私は家庭教師の口を紹介していただくつもりで訪ねたのであった。お兄さんは日教組と広教組の歴史を話して下さり、私に「広教組のお手伝いをしてみませんか」と誘って、日教組を語るパンフレットをくださった。パンフレットには、「教え子を戦場に送るな」というスローガンのもとに日教組が組織されたこと、その教師たちに強烈なインパクトを与えたといわれる高知県の教師の詩などが載せられていた。

戦死せる教え児よ

竹本源治

逝きて還らぬ教え児よ

私の手は血まみれだ

君を縊ったその綱の

端を私は持っていた

しかも人の子の師の名において

嗚呼！

「お互にだまされていた」の言い訳が

なんでできよう

慚愧、悔恨、懺悔を重ねても

それがなんの償いになろう

逝った君はもう還らない

今ぞ私は

汚濁の手をすすぎ

涙をはらって君の墓標に誓う

「繰り返し返さぬぞ絶対に！」（一九五一年、高知）

私は、その年は、アルバイトに追われて広教組の活動のお手伝いをすることはなかった。大学院に進学後、原水禁運動にかかわった関係で広教組にも少しばかりかかわるようになった。

〇九・一〇・〇三

## 人類が生き残る三つの条件

藤田 恵

### 人類は七〇年後に滅亡

三〇年以上も世界の川をカヌーで下っている野田知佑氏によると、最近のアラスカでは氷山の水や永久凍土が溶けて、氷山の上を小型機で飛ぶ観光業者が困っているという。南極の氷がどんどん溶けているニュースも珍しくなくなった。最近のエントロピー学会誌によると、過去約二百年間の二酸化炭素（温室効果ガス）の増加と地球の気温変動はほぼ一致している。この相関関係のように、自動車の排ガスなどが地球温暖化を促進している、というのがIPCC（気候変動に関する政府間パネル）の公式見解であり、世界の共通認識となつて久しい。

しかし、「二酸化炭素の濃度の上昇は温度上昇の結果であり原因ではない」。端的に言えば「地球温暖化は自動車の排ガスとは無関係」という、学者の論文も少なくない。この、世界中の自動車屋が飛び上がって喜びそうな論文も、いわゆる御用学者が書いているのならまだしも、

私の独断だが、反体制的な学者も書いているので、これは一大事ではないかと門外漢で断片的ながら学会誌等に眼を通したりしている。

いずれにしても、西沢潤一博士は地球の気温は今後数十年間に一〇倍のペースで変動すると予測されている。二酸化炭素も気温も過去に例がない速さで増加を続け、呼吸困難、感染症の異常発生、海面上昇、巨大台風が発生、旱魃や多雨等で、このままでは八〇年以内に人類は滅亡するとの警告から既に一〇年が過ぎた。しかし、後七〇年あると呑気ではいられない。最も恐ろしいのはメタンハイドレードだと私は背筋が凍る思いだ。

メタンハイドレードはメタンガスと水との化合物で、海底と南極などの永久凍土の下に現在の石油、石炭、天然ガスなどあらゆる化石燃料の二倍に相当する天文学的な一〇兆トンもあるとされている。日本近海だけでも一〇〇兆立方メートルの埋蔵量があり、これは日本の天然ガス使用料の約一六〇〇年分に相当するという。この物質は圧力や温度変化に非常に敏感で、わずかに一、二度の変化で大気中へ噴き出す。既に八〇〇〇年前にもノルーウエー沖で、埋蔵量の約三%に当たる三五〇〇億トンのメタンハイドレードが噴出したと推定されている。この量が現在の大气中に噴出すると、地球の平均気温はわずかに一〇年間で四度も上昇する恐ろしいこと

になるという。

しかし、これほど切羽詰まっても、大方は見ても見ぬ振りのどこ吹く風で、後述のように環境破壊は進むばかりだ。もう手遅れが現実となりつつあるが、座して死を待つ以外に策はないのだろうか。

#### 鬼の首「一五〇〇年周期説」

人類が滅亡しようが、地球がどうなるかが、とにかく目先の儲けが一番だというグループが鬼の首を取ったように宣伝している一つが、簡単に言うと「地球の気温上昇には約一五〇〇年の周期があり、現在の温暖化はその周期の一環で人為的な二酸化炭素の排出とは無関係」とするものだ（「地球温暖化は止まらない一五〇〇年の気候周期」SFシンガー、DT・エイバリ著、東洋経済 新報社・以下「一五〇〇年周期説」）。

しかし、学問音痴の私でもこんなインチキ本に騙されてならないと思う。その一つの根拠は、地球の過去四二万年間の二酸化炭素の濃度は一八〇ppmから三〇〇ppmの範囲に納まっていたものが、二〇〇八年九月現在の同濃度は三八六ppmであり、約一〇〇年前から一〇〇p

p m 近くも激増したことになる。そこで、前述の「一五〇〇年周期説」を認めたとしても、最後の周期・今の周期は一八五〇年に始まったらしいので、当然過去の周期では前述のように二酸化炭素濃度はすべて一八〇p p m から三〇〇p p m の範囲内であり、同濃度は三八六p p m という突出した高濃度に達したことが一度もないことは当然ながら論をまたない。このように、「一五〇〇年周期説」は、約一〇〇年前からの二酸化炭素の過去に例がない爆発的增加を無視すると同時に、過去二〇〇年間に気温が約三度も上昇するという、自然現象では説明不可能な矛盾を孕んでいる。つまり現在は「一五〇〇年周期説」では説明が不可能な段階に入っていることは明らかである。

それでも、この「一五〇〇年周期説」が正しいとすると、日本を含め世界中がI P C C と、二酸化炭素温暖化説の学者に騙されている(という本も出ている)ことになり、今まで通りの二酸化炭素出し放題で、どんどん自然を壊し続けながら、ひたすら経済成長を追い求めれば良いことになり、世の中すべて万々歳なのだろうか。

## 山、川、海、を見よ

そんな馬鹿なことはあり得ない。学者たち、特に御用学者に言う。「二酸化炭素」や「地球温暖化」がどうのこうのと言う暇があるなら、眼を良く開けて、山、川、海、を見てみよ。来る日も来る日も、壊し続けられている山は、猿と猪、釣り人しか通らない林業には不必要な大規模林道でずたずただ。全国の川という川には数千基の巨大ダムと、何百何十万基あるか誰にも数えることさえも不可能な砂防ダム群が空まで造り続けられるかのように造られ、川や沢は単なる水路と化し、正に「川の墓場」だらけの惨状だ。海は果てしなく埋め立てられ、全国の約八割の海岸はコンクリーとで固められた。それでもほとんどと侵食は進み砂浜は消える一方だ。あの低民度の象徴・テトラポットで全国の海岸は海の風景もくそもない。これらのすべてが、地球温暖化の鏡なのである。

この元凶は「山を見たら大規模林道。川を見たら巨大ダムと砂防ダム。海を見たら埋め立」と、パブプロフの犬同然の霞が関の高級官僚、これを追認する無能で現場を知らない国会議員、政府や役所の宣伝機関となり下がったNHK、大新聞等の報道機関。少なくとも三者の癒着で有権者の知る権利が奪われ、環境破壊の悪魔のサイクルが数十年も回り続けているのが現実で

ある。何でも一度回り始めたサイクルは、容易なことでは止まるものではない。社会の大部分がこのサイクルに組み込まれているからだ。今後も、苦勞して老後に備えた僅かの預金も、新円切り替えの預金封鎖や大增税、ハイパーインフレという政策でただ同然で取り上げられ、この悪魔のサイクルは回り続ける可能は極めて高いと言わざるを得ない。

#### 「環境の憲法」

最近、温暖化防止へ向けた二酸化炭素の排出の抑制とかで、新しい電気製品や自動車の買い替えを政府は補助金等を出し奨励しているが、これは後述のように策に水を入れる笑止千万な愚策だ。裁判に例えれば、憲法が無いか、憲法の解釈ができない裁判官が、個別の法律を勝手に解釈して判決を出しているようなものである。同じ行為が有罪になったり、無罪になったり、社会が混乱するのは必至である。

そこで私は、温暖化防止を本気で実施し、有効性を担保するためは当然ながら「環境の憲法」とでも言うべき、基本的な規制の枠を作り、いつもその政策なり具体的な実施策がこの枠内に収まっているかどうかを常に検証することが不可欠であると考える。

その「憲法」の案とは、米国の経済学者、ハーマン・デイリーが、人間が地球の循環系を保ち破壊することなく生きて行く限界として三つの条件である。要約すると、一、再生可能な資源は、再生される資源量の枠内で消費する。二、再生不可能な資源は再生可能な代替資源を作り出し、その生産量に見合う範囲で消費する。三、排出物の投棄は、自然の浄化力の範囲の中にとどめる（三橋規宏「ゼロエミッションと日本経済」一九九七年岩波書店一七五頁）という内容だ。

#### 政治経済等の抜本的変革

以上は、至極当然で誰にもまともには反論できないであろう。現在の大量生産大量廃棄の代表である車依存社会はすべて落第であることは言うまでもない。最近はまだ太陽光発電や風力発電が自然エネルギーとかで、救世主のようにもてはやされているが、これも大問題である。エントロピーの法則（熱力学の第二法則）で、環境を破壊しないでエネルギーを取り出すことなど逆立ちしても絶対にはあり得ないからだ。そのうえ、受光パネルや風車の製造に多くの資源やエネルギーが消費され、廃棄では必ず環境を破壊することは確実である。

どれもこれもお先真つ暗のようだ。それは、政治経済等のすべて今の社会が、環境破壊を前提に無限に経済成長を追い求めなければ成り立たない仕組みで固められているからに他ならない。

結論として、人間が地球の循環系を保ち破壊することなく生きて行くために適応可能な仕組みに、今の政治経済等のすべてを抜本的に変革する以外に道はないのである。

(二〇〇九年七月二九日)

本文に明記以外の主な参考文献

ジェレミー・リフキン「アントピーの法則Ⅰ・Ⅱ」(竹内均訳一九八二年祥伝社)、ネドラ・Hメドウズ  
他「限界を超えて」(松橋隆治他訳一九九二年ダイヤモンド社)、嶋津輝之「水問題原論」(一九九九年北斗出版)、西沢潤一他「人類は八〇年で滅亡する」(二〇〇〇年東洋経済新報社)、ジャレド・ダイア  
モンド「文明崩壊上・下」(楡井浩一訳二〇〇五年草思社)、青木秀和『お金』崩壊(二〇〇八年集英社)、公共事業チェック議員の会「ムダな公共事業の徹底見直しを実現する全国大会配布資料」(二〇〇九年水源連他)

## 徴兵制は有効か？

雨宮処凛著『怒りのソウル』から見えてくること

池上 正示

先日、所属する熊本日韓文化交流研究会で、『怒りのソウル―日本以上の「格差社会」を生きる韓国―』（雨宮処凛著 二〇〇八年 株式会社金曜日）の図書紹介をした。著者、雨宮処凛（かりん）は一九七五年生まれ。中学時代に激しいいじめにさらされ、高校時代は不登校・家出・リストカットを繰り返し、二十歳の時に阪神・淡路大震災とオウム事件が発生、激しい衝撃を受ける。大学進学に失敗し、アルバイトを何度もクビになるフリーター生活が続け、パルク歌手をしながら一時、右翼に傾倒。二〇〇〇年、その凄絶な青春を描いた『生き地獄天国』（大田出版）でデビュー。現在は、若者の「生きづらさ」の根底にある格差社会に眼を向け、その元凶である新自由主義批判の執筆・活動中。反貧困ネットワーク副代表。主著に『生きさせろ！ 難民化する若者たち』（〇七年 大田出版）『雨宮処凛の闘争ダイアリー』（〇八年 集英社）『ワーキングプアの反撃』（〇七年 七つ森書館 福島みずほとの共著）がある。

その雨宮処凛が〇八年八月、週刊『金曜日』の取材で約一週間、韓国に滞在し、様々な人々との交流の中で生み出したのが本書だ。韓国は現在、非正規雇用率が五〇%、青年失業率は二〇%。『88万ウォン世代』という本がベストセラーになっているが、八八万ウォンとは日本円にして一〇万円強。韓国の二〇代の非正規雇用者の平均月収だそう。即ち「88万ウォン世代」とは、日本でバブル崩壊後に就職適齢期を迎えた著者を含む「ロス・ジェネレーション」（失われた世代）と同じ造語であり、韓国では九七年の経済危機の時、IMF（国際通貨基金）から融資と引き換えに「構造改革」を要求され、日本と同様の「労働市場の柔軟化」に走った結果、非正規雇用が拡大、現在の二〇代は大学を卒業しても、五%は公務員や大企業の新社員として安定した生活を得られるが、九五%は不安定雇用を転々として一生を終える、と予測されるほどの、日本以上の格差社会に陥ってしまった。

著者は、このような、余りにも日本と似た、あるいはそれ以上に酷い状況下の韓国の人々と交流し、その内面にも日本との共通点を見出す。韓国版ニート、「全国ペクス連帯」との交流会では、二〇代の死因の一位が自殺であり、しかもそれを「自己責任」だと認めてしまう現実を、「88ムーブメント」を展開し、非正規雇用・ワーキングプアの問題に取り組む当事者グル

ープ「希望庁」の若者からは、現在の大学生は生活費のためのバイトに追われ、かつて盛んだった学生運動をやる余裕もないという現状を聞かされる。その上で「希望庁」は、失業対策の一環として、若者が仕事を通して社会的な価値を実感できる利潤以外の社会貢献を目的とする社会的企業の活用を試行していると書かれてあるが、そこで私は一つの疑問を抱いた。

本書も「韓国で兵役を拒否する若者」の章で詳述しているが、韓国は徴兵制があり、男子は身体検査で除外されない限り十九〜二九歳の間に義務兵役に服さねばならず、拒否は刑事罰の対象となり、社会的にも、義務兵役を果たさなければ「一人前の男」と認められない、という風潮が根強い。民主化によって緩和されたとはいえ、現在も徴兵制は韓国の青年男子に重くのしかかっている。その徴兵制を、最近のわが国ではイデオロギーに関係なく肯定する雰囲気がある。端的なものが、六二年生まれのコラムニスト、町山智浩が『論座』（〇八年一月号）に発表した「日米よ、徴兵制度を復活させよ」だ。その骨子は、①徴兵制は平等である。②故に徴兵制を導入すれば、国民の連帯感が高まり、国家に対する当事者意識が高まる。③アメリカが簡単に戦争をするのは、不平等な志願兵制だからであり、徴兵制を導入すれば、富裕層や政治指導者が戦争に慎重になる。④大人になるための「通過儀礼」は必要であり、義務兵役は最

適である。絶対的強制力を持つ「通過儀礼」を若者に課せば、ニートの問題は解決する。

このように徴兵制の「有効性」を挙げているが、本書が描く韓国の現状を見れば、怪しいと言わざるを得ないのではないか？ 韓国では義務兵役が、若者の連帯感も社会性も、自死の誘惑を克服する強さすらも保障していないことが見て取れるからだ。そもそも国民の連帯感が強い国が、日本以上の格差社会に陥るだろうか？ 「徴兵制有効論」や、それに類似する「勤労奉仕義務制論」は、机上の空論であると同時に、自らが体験していない苦痛を次代に強要する卑怯な論理であることを、本書は言外に示していると思った。

最後に、著者は日本と韓国との共通の問題を探るために訪韓したが、その初日にソウル市の大通りを埋め尽くす、ブッシュ訪韓に抗議するデモ隊に息を呑む。そして著者が交流した韓国の快男児・女傑たちは、自らの手で民主化を勝ち取った国民の自信と誇りに溢れていた。著者へと共に敬意を表したい。